

<学会発表及び研究発表会>

○食品と環境中からのノロウイルスの検出法の検討

・岩切章, 阿波野祥司, 山田亨, 永野喬子, 大浦裕子

「第34回日本食品微生物学会

(平成25年10月3日 東京都)」

ノロウイルス (NV) による食中毒疑い事例において, 原因食品や環境中からウイルスの検出が可能になれば, 感染源や感染経路の推定に役立つ科学的な所見も補完される. そこで, 平成 21 年の厚生省通知による A 型肝炎ウイルス検出方法 (表面汚染の推定される食品の処理のポリエチレングリコール (PEG) 法) と平成 22 年の厚生労働科学研究 (秋田県健康環境センター) による食品中のウイルス検査実施に向けてのパンソルビン・トラップ (パントラ) 法で, 食品, 拭き取り材料および水を対象に NV の添加回収試験を行い, 事例発生時の疫学調査への有用性について検討することを目的とした. 市販食品, 水, 模擬拭き取り検体等を対象とした食品乳剤に NV を一定量添加して, パントラ法と PEG 法による NV の回収率を比較した結果, パントラ法の方が PEG 法より添加回収率が高かったが, 水検体と模擬拭き取り検体では, 両者の方法で大差は確認されなかった. 市販加熱用カキからのリアルタイム PCR (RPCR) 法と nested-リアルタイム PCR (N-RPCR) 法を用いた検査では, N-RPCR 法では両方法で陽性と判定され, 食品中の微量な NV の検出感度の向上に有用と考えられた. NV を原因とする食中毒 2 事例で検査依頼がされた施設拭き取りと検食検体について, N-RPCR 法で検査したが, いずれの検体からも NV が検出されなかった. その理由として, 原因ウイルスの残存量や検出感度の面が考えられるが, 今後も保健所による詳細な疫学調査を参考に, 更に検出率の向上を検討していく必要がある.

本研究の一部は, 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金食品中の病原ウイルスのリスク管理に関する研究により実施した.

○保健所からの理化学検査依頼状況

・森岡浩文, 小玉利奈, 湯浅智識, 越智洋, 安部留美子, 野中勇志, 山本雄三, 野崎祐司

「第 39 回九州衛生環境技術協議会

(平成 25 年 10 月 11 日 宮崎市)」

近年, 消費者の食の安全に対する関心は, 様々な事件や問題の発生とともに高まっており, 保健所に寄せられる食品苦情や相談件数も増加し多岐にわたっている.

また, 保健所に寄せられる苦情, 相談には, 食品に関するもの以外にも, 動物の変死といった事例もあり, 適切な検査機関がないため当所に持ち込まれるケースが増加している.

そこで, 今回, 保健所からの依頼検査の概要と分析事例の一部について紹介する.

1. ソルビン酸検出事例

食品添加物の収去検査で使用表示のないソルビン酸を検出したので, 再発防止のため製造工程の検証を行い, ソルビン酸の拭取試験を実施した.

2. 交雑フグ

交雑種と思われるフグの部位ごとのテトロドトキシンの定量と種の同定を行った.

3. カラス変死事例

保健所管内でカラスの大量死事件が発生したため原因究明を行った.

4. 犬変死事例

飼い犬が変死したため原因究明を行った.

5. 猫変死事例

飼い猫が変死したため原因究明を行った.

食品苦情では, 異物, 異味, 異臭などの事例が多くを占めるため, 日頃から文献等で多くの情報を収集, 蓄積し, 分析可能かどうか検証しておくことが重要である. さらに, 原因究明ができなくても分析過程を詳細に記録し, 分析事例集として蓄積することも重要となる.

このように苦情検査では, 様々な分析技術, 知識の蓄積が必要となることから個々の担当者の技術研鑽によるところが大きい. 各地衛研の技術向上のためには, 複数の研究機関が綿密に連携し事例報告会などを通じ技術向上を図ることが望ましいと考える.

○有害物質摂取量の推移と今後の推定について

・渡邊敬浩¹⁾, 片岡洋平¹⁾, 五十嵐敦子¹⁾, 高橋哲夫²⁾, 清水正法³⁾, 高津和弘⁴⁾, 寺田久屋⁵⁾, 小林博美⁶⁾, 中村雅子⁷⁾, 石川順子⁸⁾, 山